NIPPON STEEL MONTHLY

2008
AUGUST &
SEPTEMBER
VOL.181

8·9

特集

多くの支援者とともに歩み、さらなるステージへと発展する新日鉄の音楽メセナ活動

――紀尾井ホールが来館者数200万人達成！

先進のその先へ、新日鉄

A Group News Magazine

多くの支援者とともに歩み、さら
新日鉄の音楽メセナ活動―紀尾井

1995年にオープンした紀尾井ホールは、本年5月16日に行われた「紀尾井シンフォニエッタ東京第64回定期演奏会」で、来館者200万人を達成した。これはホールを運営する（財）新日鉄文化財団の地道な活動実績と、ホールに足を運んでいただいた多くの音楽ファン、サポート会員などの支援があっ

半世紀にわたり音楽活動を支援

新日鉄は、鉄鋼業として産業基盤の構築などを通じて日本経済の発展を支えてきたが、社会貢献活動の一環として、音楽文化の領域においても今日までおよそ半世紀にわたり支援を続けている。この活動は、企業は社会を構成する一員として、「社会と共生し、社会から信頼される存在でなければならない」という理念のもとで実施されており、1955年までさかのぼる。この年、新日鉄はクラシックコンサートのラジオ放送「フジセイテツコンサート」（後の「新日鉄コンサート」）の提供を開始した。戦後まもない日本では、経済大国への階段を駆け上る過程で、物質的な豊かさとは別の、国民の心の豊かさを満たす芸術文化の一層の振興が求められていた。その後も「新日鉄音楽賞」の創設や、音楽活動の拠点となるコンサートホール「紀尾井ホール」の設立などを通じて音楽メセナ活動を継続してきた。

個性際立つ２つの紀尾井ホール

1995年４月２日、新日鉄の創立20周年の記念事業として、音楽活動の拠点となる「紀尾井ホール」がオープンした。同ホールは、紀尾井ホール（800席、クラシックなど洋楽専用）と紀尾井小ホール（250席、邦楽専用）で構成されている（**写真1、2**）。

紀尾井ホールは、室内オーケストラ演奏に適した音響空間を創造するため、残響時間が最も心地よいとされる1.8秒（満席時）に計算されており、その優れた音響効果は出演者、来館者から高い評価を得ている。また、ホールの形状はヨーロッパの伝統的スタイルであるシューボックス形式（※1）を採用している。

紀尾井小ホールは、音響や装備を完全に邦楽演奏向けに設計したもので、演劇的設備が少なく、多目的用に設計されたものではない日本初の邦楽専用ホールとして注目を集め、高い評価を得ている。

社会とともに地域とともに、積極的に活動を展開する新日鉄文化財団

また、同じ創立20周年の記念事業として、この紀尾井ホールを拠点とする（財）新日鉄文化財団（以下、財団）が、新日鉄およびグループ会社などの出資により設立され、音楽家の育成、公演の開催、優れた音楽活動に対する支援などを展開している。

写真１　紀尾井ホール

写真２　紀尾井小ホールでの主催公演より
「江戸音楽の巨匠たち（河東節）」2007年11月25日

※1　シューボックス形式：靴箱のような長方形のコンサートホールを指す。ホール両側面の反射音が多く、豊かな響きを生み出すためクラシック音楽に最も適しているとされている。

なるステージへと発展する
ホールが来館者数200万人達成！

紀尾井ホール

て達成されたものだ。今号では新日鉄が長年取り組んできた音楽メセナ活動を振り返り、常に意欲的な企画で音楽文化の価値向上に努めている（財）新日鉄文化財団の取り組みを紹介するとともに、ますます充実する紀尾井ホールの今後を展望する。

財団設立のテーマは「発掘・創造・育成・交流」。このテーマに基づき、紀尾井ホールの主催公演の中核を担う首都圏初の室内オーケストラ、「紀尾井シンフォニエッタ東京」の定期公演やクラシック音楽のリサイタル、また小ホールにおける日本伝統音楽の公演、さらには各種公開レッスンなどの開催を通じ、日本の音楽文化のさらなる発展に寄与することを目的に活動している。

「発掘」

日本の音楽文化の発展ならびに将来を期待される音楽家の支援を目的とした「新日鉄音楽賞」は、新日鉄創立20周年とラジオ番組「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設けられた。将来を期待される若手アーティストに贈られる「フレッシュアーティスト賞」を受賞した演奏家の多くは、現在、世界の第一線で演奏活動を展開している（2008年の新日鉄音楽賞についてはP6）。

また、紀尾井ホールを舞台に「紀尾井ニュー・アーティスト・シリーズ」を年4回実施。若手演奏家にリサイタルの機会を提供している。

「創造」

主催公演において、洋楽・邦楽ともに話題性のある新しい試みの公演を展開している。

洋楽に関しては、2007年から室内楽ホールの特徴を活かした「紀尾井の室内楽」シリーズを実施。財団の積極的な招致活動により、世界的に有名でも来日する機会の少ない演奏家の公演が身近に楽しめるようになった。これまでにペーター・レーゼル氏（ピアノ）、フェルメール・クァルテット、デジレ・ランカトーレ氏（ソプラノ）などの演奏家が紀尾井ホールに出演し、その完成度の高い演奏が絶賛された。30年ぶりのリサイタル公演で、ハイドンやベートーヴェンのピアノソナタを演奏したレーゼル氏のリサイタルは、雑誌『音楽の友』（音楽之友社）の2007年のベスト・コンサートの一つに選ばれた。フェルメール・クァルテットは、自らの引退ツアーで、以前出演した紀尾井ホールのステージに立つことを熱望し、公演が実現した。

邦楽では、若年層が日本の伝統音楽に触れる機会が激減している現状を踏まえ、邦楽をよりわかりやすく親しみやすい存在として感じてもらえるように、従来とは異なる視点でのプログラムを提供している。

例えば、2007年からの3年計画で実施されているシリーズ「江戸音楽の巨匠たち」は、竹本義太夫ら江戸音楽の創始者の軌跡を、その人物像、時代背景、事件などを織り込んで浮き彫りにする演出になっており、邦楽公演の新たなスタイルとして話題を集めている。

音楽の本質を追求し、ヨーロッパ的なセンスを持つ紀尾井シンフォニエッタ東京

◉ ヴァイオリニスト　**ラファエル・オレグ**氏

共演のたびに紀尾井シンフォニエッタ東京が好きになります。北海道ツアーを通じて、メンバーの積極性と高いレベルの演奏を維持する力に驚きました。彼らの音楽家魂は、合奏の基本的なスキルを超えて音楽の意味を追求します。指揮者である尾高忠明さんの力によると同時に、メンバー個々が目標を見据えているからです。それはエンターテインメントを超えた、哲学的・人間的な資質です。

紀尾井シンフォニエッタ東京はいい意味でヨーロッパ的ですね。解釈を“その場”で自発的に変える力と、スタイルに対するセンスという点においてです。彼らとまた共演できることを願ってやみません。

写真３「女流義太夫の新たな世界 良弁杉由来～二月堂の段」2008年2月25･26日
左から吉田文雀氏、吉田和生氏、竹本駒之助氏、鶴澤津賀寿氏

写真４　2005年、「ドレスデン音楽祭」に出演した
紀尾井シンフォニエッタ東京

また本年２月には、「女流義太夫の新たな世界 良弁杉由来～二月堂の段」が大きな話題を呼んだ（**写真３**）。これは女流義太夫の人間国宝竹本駒之助氏と、文楽人形の人間国宝吉田文雀氏が実に50年ぶりの共演を紀尾井小ホールで果たしたもので、新聞各紙やテレビで報道された。

「育成」

紀尾井ホールとともに誕生した紀尾井シンフォニエッタ東京も、この数年でさらに円熟味を増してきた。

2005年に「ドレスデン音楽祭」に出演（**写真４**）。音楽祭付きオーケストラとしての名誉を担いつつ、ドレスデン州立歌劇場、マイセンドームなどの各会場で見事な演奏を披露し、その名を世界に深く印象付けた。

メンバーそれぞれがソリストとして十分な実力を備える紀尾井シンフォニエッタ東京の演奏を楽しみにされる聴衆が増えており、「客席が７割埋まれば興業的には成功」と言われるクラシック演奏会において、年５回紀尾井ホールで開かれる定期演奏会は、常に満席で好評を得ている。

「交流」

定期演奏会以外にも、紀尾井シンフォニエッタ東京は全国各地で地方公演を開催し、来場者や地域の人たちとの交流を図っている。

2006年には指揮者でチェリストのマリオ・ブルネロ氏を迎えた岩手公演を成功させ、演奏会と同時に地元の小中高生や市民を招いた公開ゲネプロ（※2）を行い、訪れた生徒たちに楽器を指導する特別レッスンを行った。本年６月にも紋別、室蘭、札幌、函館の４カ所を回る北海道公演を実施し、同様に行われた公開ゲネプロや特別レッスンで来場者との交流を深めた（**写真５、６**）。

さらに国内で行われる取り組みとして、いずみホール（大阪）とさまざまな交流を実現。両ホールのレジデントオーケ

新日鉄の情熱で、伝統文化の発展のための活動継続を

◉ 人形浄瑠璃文楽太夫　人間国宝　**竹本 住大夫**氏

新日鉄は歴代の経営者が邦楽に馴染み情熱を持っておられました。私はそのような新日鉄の邦楽に対する情熱が紀尾井ホールにも表われていると思っております。おかげさまで『住大夫三夜』を三年間無事に務めさせていただきました。紀尾井小ホールはお客様と舞台が近くて気持ちの良いホールです。これからも日本の伝統文化の発展のために、ぜひ新日鉄文化財団の活動を続けていただきたいと願っております。観客数を増やすには大変な努力が必要ですが、スタッフの皆さんも頑張ってください。私たちも勉強に励み、良い舞台を勤めていくよう努力をしてまいります。

良い雰囲気のホールで、他に見られない独自の企画を

◉ 常磐津節浄瑠璃　人間国宝　**常磐津 一巴太夫**氏

私は1995年に人間国宝になり、同じ年、紀尾井ホールの柿落しに出演しました。また、この小ホールでの録音で文化庁芸術祭レコード部門大賞もいただき、とても思い出深いホールです。小ホールは雰囲気が良く、企画面でも他に見られない独自の公演を実施しており、邦楽愛好者の裾野の拡大に貢献しておられます。私たちも、より多くの方に楽しんでいただけるようわかりやすく良い演奏を心掛けていきます。日本でも数少ない邦楽専用ホールを運営している新日鉄文化財団の一層のご健闘を期待しています。

※2　ゲネプロ：ゲネラルプローベ（General probe〔独〕）の略。舞台上で本番の進行通りに行われる最終確認のリハーサル（通し稽古）のこと。

写真５　紀尾井シンフォニエッタ東京 北海道公演の様子

写真６　室蘭での特別レッスンの様子

ストラによる相互公演を行うなど活動の輪を広げている。

良質な企画を提供して日本のリーディング・ホールへ

財団の積極的な活動展開が実り、主催公演の多くでチケットの完売が目立つようになった。「紀尾井シンフォニエッタ東京定期会員」（レジデントメンバー）は約700名（2002年）から現在1,050名に増え、客席の約70％は定期会員で占められている。チケットの優先予約や割引などの特典が受けられる「紀尾井友の会会員」は約1,100名（2002年）から現在1,550名に増えた。また、紀尾井ホールへの支援を目的とした「紀尾井ホールサポートシステム」は、法人会員108口、個人会員330口の支援を得ている。

景気低迷時には財政基盤の縮小を迫られた時期もあったが、新日鉄およびグループ企業の支援により財団はその危機を乗り越えてきた。（財）新日鉄文化財団事務局長の町田龍一氏は次のように語る。

「これからも演奏家、サポート会員そしてお客様の期待に応えられるよう、さらに充実した企画・運営に向けて取り組んでいきます」

（財）新日鉄文化財団
事務局長
町田 龍一 氏

紀尾井シンフォニエッタ東京は、2009年にブルネロ氏指揮によるイタリア・スペイン公演を計画しており、この機会を活かし、世界の主要音楽祭への出演を目指していく。また、新日鉄と戦略的提携を結ぶPOSCOとの日韓交流の取り組みとして、韓国公演を予定している。一方、紀尾井ホールは、2009年から３年に一度開催されるヴィオラの国際コンクールの会場となることが決定しており、世界から訪れる参加者、審査員たちの交流の場となる。

高い集中力で作品の求める音を実現できるオーケストラ

◉ 指揮者・ヴァイオリニスト　**ライナー・ホーネック**氏

© 池本さやか

紀尾井シンフォニエッタ東京のメンバーの集中力は非常に高く、全員で素晴らしいコンサートにしようという想いが伝わってきました。シューベルトの音楽は決して簡単ではなく、特に響きを作るのが難しいのですが、彼らはそれにしっかりと応えてくれたと思います。

また紀尾井ホールの音響も素晴らしく、シューベルトの音楽を作るのにぴったりでした。紀尾井ホールで皆さんと演奏できたことは、私にとって、とても大きな喜びです。また皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。

創造的な雰囲気に溢れるホール

◉ ヴィオリスト　**今井 信子**氏

©Marco Borggreve

紀尾井ホールで演奏していると、まるで古い教会にいるような錯覚に陥ります。音響が良いだけでなく、教会にいるような敬けんで真摯な気持ちになります。音楽家としての初心に返ることができるのです。

そしてスタッフの方々の惜しみない協力にはいつも勇気づけられます。私たち演奏家も、より良い演奏をしてそれに応えようとする、創造的な雰囲気がホールには溢れています。１本の木のごとく、素晴らしいスタッフの皆さんがホールという幹をしっかりと支えているからこそ、「ヴィオラスペース」や「国際ヴィオラ・コンクール」など枝葉となるさまざまな企画が、彼らに支えられ育っていくことができるのだと思います。

邦楽では、日本の伝統芸能を継承し普及に努める企画を実施していく。

「若い世代へ邦楽の魅力、素晴らしさを伝えるワークショップ的な企画を現在考案中です。同時に次代を担う若い邦楽演奏家に焦点を当てた公演企画を考えていきます」(町田氏)。

現在、多数の音楽ホールがひしめく東京にあって、紀尾井ホールは常に良質で他のホールには見られない特徴を備えた企画を発信していくことに注力している。

「やはり、たくさんのお客様でにぎわってこそ価値のある公演です。私たちは時代の変化とお客様の求めるものをうまくミックスさせ、常ににぎわいのある、他から注目されるリーディング・ホールを目指していきます」(町田氏)。

皇后陛下、皇太子殿下が紀尾井ホールにご臨席

紀尾井ホールには、天皇、皇后両陛下や皇太子殿下もご臨席の機会が多く、これまでに、皇室の紀尾井ホールご来臨は59回にのぼる。最近では5月21日に「別府アルゲリッチ音楽祭　第10回記念公演 in 東京 室内楽コンサート」に皇后陛下が、5月27日の「ヴィオラスペース2008 vol.17」と5月30日の「2008年日伯交流年記念 アントニオ・メネセス チェロ・リサイタル」に皇太子殿下がご臨席された。

別府アルゲリッチ音楽祭 第10回記念公演 in 東京 室内楽コンサートにご臨席の皇后陛下

チェロ・リサイタルにご臨席の皇太子殿下。左隣はアンドレ・アマード駐日ブラジル大使

別府アルゲリッチ音楽祭 第10回記念公演in東京 室内楽コンサート

大分県別府市で毎年行われる「別府アルゲリッチ音楽祭」が第10回を迎え、その節目を記念する室内楽コンサートが、5月21日、紀尾井ホールで行われた。

(財)新日鉄文化財団の関澤秀哲専務理事(新日鉄副社長)の案内でご着席された皇后陛下は、世界屈指のピアニストマルタ・アルゲリッチ氏とチェリストのミッシャ・マイスキー氏による『チェロ・ソナタ イ短調』など情熱的な演奏を聴衆とともに楽しまれた。

ヴィオラスペース2008　vol.17　((財)新日鉄文化財団およびテレビマンユニオン共同主催)

「ヴィオラスペース」は、世界的ヴィオラ奏者の今井信子氏を中心に、これまで独奏楽器として取り上げられることが少なかったヴィオラの魅力を世界へ向けて発信する企画として、1992年にスタートした。2003年からは、主催の一翼を担っていたカザルスホールに代わり、紀尾井ホールへと活動の場が移った。

第17回目を迎えた今回は、5月27日の第一夜を「ヴィオラの妙なる響き」、28日の第二夜を「ヴィオラ協奏曲の饗宴」と題し、ヴィオラとオーケストラの2つの視点からプログラムを構成した。今回もヴィオラスペースにご臨席された皇太子殿下は、ヴィオラ独自の響きを、無伴奏から八重奏までの多彩な組み合わせで楽しまれた。

2008年日伯交流年記念 アントニオ・メネセス チェロ・リサイタル

1908年6月18日に165世帯の最初の日本人移住者を乗せた汽船「笠戸丸」がブラジルのサントス港に到着してから100周年を迎えた2008年を、ブラジルと日本の両政府は「日本ブラジル交流年」と定めた。2008年は100周年を祝うと同時に、両国の今後100年の交流に向けた土台を構築することを目的に、さまざまなイベントが開催されている。

「日本ブラジル交流年」名誉総裁にご就任された皇太子殿下がご臨席された今回のリサイタルでは、ブラジル出身のチェリスト アントニオ・メネセス氏により、シューマン、ブラームス、メンデルスゾーンに加え、ブラジルを代表する作曲家ヴィラ＝ロボスの『ブラジル風バッハ第2番』などが演奏された。

第18回 新日鉄音楽賞 贈呈式・受賞記念コンサート

7月18日、(財)新日鉄文化財団　紀尾井ホール(東京・千代田区)で、「第18回新日鉄音楽賞」の贈呈式と受賞記念コンサートが行われた。満席となった800席のホールは、受賞者に送られる惜しみない拍手に包まれた。

受賞記念コンサートで演奏する上原彩子氏

クラシック音楽をテーマとした写真について語る木之下晃氏

音楽文化の発展と音楽家の一層の活躍を支援する新日鉄音楽賞

新日鉄音楽賞は、1990年に新日鉄創立20周年と新日鉄提供のラジオ番組「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して創設されたもので、日本の音楽文化の発展と将来を期待される音楽家の方々の一層の活躍を支援することを目的としている。同賞では、将来を期待される優れたアーティストを対象とした「フレッシュアーティスト賞」と、クラシック音楽をベースにした活動を行っている個人を対象に、演奏家に限らず音楽文化の発展に大きな貢献を果たした方に贈る「特別賞」の2つの賞が設けられている。

受賞者に聴衆から盛大な拍手

第18回目となる今回は、フレッシュアーティスト賞をピアニストの上原彩子氏、特別賞を写真家の木之下晃氏が受賞した(受賞者インタビューはP7～10)。

上原氏は、2002年の第12回チャイコフスキー国際コンクール優勝後、さらなる研さんを重ね、音楽家としての資質を高めたここ数年間にわたる充実した活躍ぶりと、その演奏における音楽の内容の豊かさが選考委員一同に高く評価された。

木之下氏はフリーの写真家として、クラシック音楽をテーマに40年以上にわたり音楽家や劇場、ホールなどを撮り続けてきた。卓絶したカメラアイによって、演奏そのものや音楽家の本質的な面を浮かび上がらせた彼の作品は、クラシック音楽界を側面から支えるものであり、その功績が高く評価されたことが受賞につながった。

贈呈式では、(財)新日鉄文化財団理事長の三村明夫(新日鉄代表取締役会長)が挨拶し、受賞者に表彰状とトロフィー、賞金を贈呈した。受賞記念コンサートでは、上原氏がプロコフィエフのバレエ「ロメオとジュリエット」からの小品op.75、グリーグの抒情小曲集、リストのスペイン狂詩曲などを演奏し、聴衆は盛大な拍手を送った。

三村理事長より表彰状・トロフィー・賞金が贈呈される

第18回
新日鉄音楽賞
受賞者
インタビュー

幸せと明日へのエネルギーを感じてもらえる演奏をしたい

ゲスト◉ピアニスト〈フレッシュアーティスト賞受賞〉

上原 彩子氏

プロフィール◉うえはら・あやこ
1980年、香川県生まれ。3歳からヤマハ音楽教室に通い始め、90年よりヤマハマスタークラスに在籍し本格的にピアノを学ぶ。92年、ドイツの第3回エトリンゲン国際青少年ピアノアカデミーコンクールA部門にて第1位。2000年、第5回浜松国際ピアノアカデミーコンクールでアカデミー史上初のグランプリを受賞。シドニー国際ピアノコンクールでも第2位に入賞する他、多数の賞を受賞する。02年6月、第12回チャイコフスキー国際コンクールにて、女性初のピアノ部門第1位を獲得。日本人初の快挙でもあり注目を集める。
これまでに世界各地でのリサイタルや音楽祭に出演。デュトワ指揮でNHK交響楽団やゲルギエフ指揮のマリンスキー管弦楽団など、多くのオーケストラとの共演を果たしている。CDは日本人として初めてEMIクラシックスと契約し、チャイコフスキーの作品集を収めた『グランド・ソナタ』、フリューベック・デ・ブルゴス指揮のロンドン交響楽団と共演したチャイコフスキーの『ピアノ協奏曲第1番』が世界でリリースされている。08年10月にはクリスチャン・ヤルヴィ指揮ウィーンキュンストラー管弦楽団との共演がオーストリアおよび日本で予定されている。

自分の作品を好きな音楽で残したかった（木之下）

――新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。初めに、この道に進まれたきっかけなどをお聞かせください。

上原 母にヤマハの「3歳児ランド」という子ども向けの音楽教室に連れて行かれたのがピアノとの出会いです。母は私をプロにしたいと思ったわけではないのですが、毎日、歌ったり踊ったりするのが本当に楽しくて、遊びながら自然にピアノも大好きになっていました。

本格的にピアノを始めるようになったのは小学校4年生の時、ヤマハのマスタークラスのオーディションに合格して、東京に通うようになってからです。ピアノを専門的に習う子や作曲を学ぶ子などが集まっていて、私の生活もピアノ中心になりました。ロシア人の先生の指導を受けるために、先生の滞在日程に合わせて学校を休んだりもしましたが、その先生から、1曲1曲を丁寧にじっくりと、曲の歴史や背景、作曲家の内面まで深く掘り下げる姿勢を学びました。チャイコフスキーコンクールで優勝できたのもこの先生に学んでいたおかげだと思います。

6年生の時にドイツの子ども向けの国際コンクールに初めて出場して、幸い優勝できたのですが、そのときのお城のような会場の音の響きの素晴らしさや、日本人とは違うお客様のダイレクトな反応は新鮮な驚きでした。以来、人前での演奏も好きになり、いろいろな国際コンクールに出場しました。コンクールで知り合えた友人は、現在、世界中で活躍しています。めったに会うこともできませんが、コンサートがあれば聴きに行ったりと、一生の宝物になりました。

木之下 私が子どものころは戦争前で写真も珍しい時代。新聞社の地方支局で記者をしていた父が暗室で現像している時、真っ白な印画紙に画像が

ヤマハのクリスマスコンサートで自作曲を演奏
（芦屋市の「ルナホール」にて。当時6歳）

なによりも相手に喜んでもらうこと。そのために良いものを撮る。すべてはその積み重ね

ゲスト◉写真家〈特別賞受賞〉

木之下 晃氏

プロフィール◉きのした・あきら

1936年、長野県生まれ。日本福祉大学卒業後、中日新聞社、博報堂を経てフリーの音楽写真家となる。以後40年にわたってクラシック音楽をテーマに、世界の音楽家や劇場、ホールなどを撮影。音楽家の本質をとらえ、"音を見せる"作品として世界中から高い評価を得ている。
34冊の写真集を刊行。主なものに『小澤征爾の世界』、『世界の音楽家 全3巻』、『巨匠カラヤン』、『朝比奈隆-長生きこそ最高の芸術』、『カルロス・クライバー』、『武満徹を語る』、『The MAESTROS』、『ヴェルディへの旅』などがある。71年の『On STAGE～音のある風景』（銀座サロン）を皮切りに、和光ホール、神奈川県民ホールをはじめ各地の美術館などでの展覧会も数多く開催。世界各国の政府からの招聘も15回に及ぶ。現在、『音楽現代』、『音楽の友』、『モーストリー・クラシック』などで連載中。
71年日本写真家協会新人賞、85年第36回芸術選奨文部大臣賞、06年日本写真家協会作家賞、07年には紺綬褒章を受章。

浮かび上がってくるのを見て父がまるで魔法使いのように思えました。それが写真を好きになったきっかけです。高校時代、長野県の諏訪に、日本で最初の35ミリフィルムのカメラを作ったオリンパスの下請け工場ができました。その工場主の息子が同級生だったことから、強引にカメラを借りて（笑）、授業風景をはじめ、いろいろと撮りまくり、卒業アルバム委員会を自分で作って一人で自分の写真をまとめて卒業アルバムを作りました。ですから、このアルバムが私の処女作のようなものです。

やがて新聞社を経て広告の世界に入りました。高度成長期でポスターやパンフレットなどの広告作りの仕事は華やかでとても面白かったです。でもどんなに良い写真を撮っても広告はその瞬間、それきりなんですね。広告カメラマンはみんな自分の作品を残したくなるんですが、私はそれを好きな音楽でやりたかった。そこで、フォークやジャズ、ロック、70年代のポップスなどを撮りました。ジョン・コルトレーンやレッド・ツェッペリン、ピンク・フロイドなども撮ったんですよ。

博報堂時代の木之下さん　撮影：渡辺秀俊

このころの私の写真は被写体をはっきりとらえるのではなく、ステージ全体の雰囲気を収めたくて、わざと画像をぶらす独自の撮り方をしたのですが、それが「音を感じる」と評判になり、いろいろな賞をいただいたり、コマーシャルカメラマンとしてはちょっと知られるようになりました。

ところが、あるとき社長に呼ばれて、「カメラマンのままじゃ偉くなれないから、広報室のスタッフにならないか」と言われたんです。迷いに迷って、結局会社を辞めて写真家として独立することにしました。37歳でした。フリーになってから、音楽の中でもクラシックなら長く残ると思い、クラシック専門の写真家になろうと決めました。ところが広告と違い、やっぱりクラシックのカメラマンの収入はとにかく安くて、食べていくのが本当に大変でした。

木之下氏が撮影した上原氏の演奏写真 ©木之下晃

相手が納得するまで繰り返す。そうして築かれた信頼は次へとつながる（木之下）

――木之下さんは気難しいと評判のカラヤン氏をはじめ、多くの巨匠を撮影されています。どのようにして信頼を得てきたのでしょうか?

木之下 写真の仕事において、私は雑誌に写真を載せることよりも、そこをスタートに写真集にまとめることを目的としていたので、雑誌社からの依頼だけではなく、自分が撮りたいと思う音楽家に直接取材を申し込んでそれを雑誌に掲載してきました。

この仕事で何よりも大切なのは、撮った写真を相手に納得してもらうことです。撮り手が気に入った写真を被写体本人が気に入るとは限らないんですね。人間ですから、みなさんいろいろなこだわりがあります。相手を知らなくてはそれもわかりません。私は演奏家なら演奏する姿を、作曲家なら仕事場での仕事姿を撮ります。そして、撮った写真を、本人に見せて意見を聞き、それを意識してもっと良い写真を撮る。その繰り返しによって信用を得ていったのだと思います。

カラヤンを最初に撮ったときに、本人に見せた２枚の写真のうち１枚は「素晴らしい」といわれ、あとの１枚はその場で破られました。彼は、自分を残すことに強い意識を持っている人で、演奏はもちろん、写真に限らず、文章やCDなどに対してもとにかくチェックが厳しい人でした。

幸いカラヤンにはとても気に入られ、可愛がってもらいました。彼の、ヨーロッパにある４つの家に招かれたことはとても自慢ですし、一時期は専属カメラマンとしてザルツブルクに来ないかと誘われました。特に厳しいことで有名だった彼のリハーサルに入って写真を撮ることを許されたのは次の仕事につながりましたし、私自身、大きな自信になりました。

とにかく、本人に喜んでもらうことが一番。こうやって知り合った相手の中には、その後も付き合いがずっと続いている人も大勢います。ロリン・マゼール、ズービン・メータなどや、小澤征爾さんもその一人です。お互いにまだ若かったころ、リハーサルの間も自由に撮らせてくれました。今の巨匠たちも、昔はみんな若かったんですよ（笑）。

ポーランドでツアーを行ったときの様子（当時16歳）

何ごとにも動じない集中力を持って臨んだチャイコフスキーコンクール（上原）

――上原さんは2002年にチャイコフスキーコンクールで日本人初、女性初の優勝として話題を集めましたが、そのときのエピソードをお聞かせください。

上原 その４年前に出場したときには本選まで進めませんでした。ロシアは時間どおりに物事が進まず、小さなハプニングも多い。ですからコンクールを乗り切るために“何があっても動じない”、“集中する”ことを心掛けました。

チャイコフスキーコンクールは、１次予選から会場に多くのお客様が入ります。コンクールの第１回から通い続けている方も多く、演奏が気に入らなければ席を立ってしまう、ある意味で審査員よりこわい存在なんです。予選ではその雰囲気に飲まれて自分の力が出せず、本選の方が調子が良かったほどでした。

優勝の瞬間は、うれしさよりも取材に応えるのが精一杯でした。でも何回も何回もカーテンコールがあって、取材や着替えをする間も客席で私を待ってくださるお客さんの拍手に包まれるにつれて、頑張って本当に良かったと実感しました。

翌日からはコンサートやリサイタルのオファーをたくさんいただきましたが、それまでは学生でしたから、いきなり年間100ものステージをこなすような生活はできません。何よりも優勝したからといって、いきなり上手になるわけじゃない。周囲の盛り上がりに流されて調子に乗らないよう、マネージャーと相談して、練習時間とのバランスも取りながら、できる範囲で仕事をするようにしました。

続けること、練習を繰り返すことで、ふと変化や成長を感じる（上原）

―― 仕事の中で喜びを感じるのはどんなときですか? また、そのためにどんなことに気を遣っていらっしゃいますか?

上原 本当に調子の良いときには、弾いていることを忘れて、聴衆と一つになり音楽の中で息をしているような感じになることがあります。家で弾いているときには決して感じられない、そんなときが音楽をやっている一番の喜びなんです。残念ながらいつもそうではなくて、弾きながら「ここが悪かった」と反省したり考えているときもあります。ですから、準備と練習が必要なんですね。楽譜を見なくても演奏できるくらいその曲が身体に入っていなければ良い演奏はできないんです。

以前はソロの方が気が楽だと思っていましたが、最近はオーケストラとの共演も好きになりました。多分、自分とは違うものを受け入れていく余裕がでてきたのだと思います。オーケストラはみんな個性もバラバラで、最初は互いに探り合うのが大変ですが、練習を通して譲り合い、認め合って作り上げることに楽しさを感じています。

木之下 本当に素晴らしい写真が撮れたときには、自分の存在が消えて、あたかも神様に撮らされているように感じます。その時はシャッター音も聞こえず、自分で意図しなくても自然に完璧な構図で撮れているのです。作品として残るのはそんな写真です。私の人生は、そのような写真をどのようにしたら撮れるかを考え続けているのです。

仕事を通して世界の巨匠たちに感じるのは、彼らの集中力のすごさです。カラヤンも小澤さんも棒を振り出したら、他に何も見えなくなる。この集中力の強さで、仕事ができるかどうかが決まると言っても良いと思います。これは上原彩子さんもそうですよね。その集中力をつける訓練の仕方は人それぞれなのでしょうが、巨匠について言えるのは、みな努力家です。そして何よりも、音楽が本当に好きなんだろうということですね。彼らの勉強や練習量は半端ではないのです。

もうひとつ大切なことは、長く続けることです。私の場合、若いころは失敗することもあると思って、とにかくたくさんシャッターを切っていたのですが、不思議なことに、若いころに比べてだんだんロスが減っていくんです。繰り返し、積み重ねること、それがたまると力になるんだと思います。

上原 私も続けることが本当に大事だと感じるようになりました。大変ですが得られるものは大きい。毎日続けていると、ふと自分の変化や成長を感じることがあります。自分では気付かず、人から褒められて自覚できることも。そんなときは本当にやってきて良かったなとうれしくなります。

木之下氏の写真展「世界の巨匠101人」（ミューザ川崎シンフォニーホール）にて、ブレンデルの眼鏡に鍵盤が映りこんだ作品の前で ©三好英輔

――今後の抱負、紀尾井ホールの感想などをお聞かせください。

上原 私が演奏を通してできるのは、エネルギーを送ることです。聴きに来てくださる方が、日常のこまごまとしたことを忘れて幸せなときを感じてくれて、翌日からの生活のエネルギーにしてもらえるような演奏をしたいと思っています。

紀尾井ホールは音の響きがとても豊かだと思います。演奏していて聴衆と一体になれる感じが好きなので、とても心地良いです。

木之下 紀尾井ホールですが、実は設計段階から関わっているんです。私は、最近日本につくられた劇場の多くに、写真撮影のブースや写真を撮るための窓を作るようにお願いしてきました。リハーサルではなく、本番の緊張感を撮影するには、音が聞こえて、良いアングルで撮るための場所が必要なんです。紀尾井ホールはとてもうまくいった例なんです。

私は演奏家とは別に、自分で撮りたいと思った約300に及ぶ世界中の劇場を訪れて撮り続けてきました。日本では山間部に残る江戸時代の古い劇場も探っています。このほかモーツァルトなど昔の作曲家たちの足跡を写真でたどってもいます。今後はこうした未発表の取材ノートをまとめていきたいと思っています。

新国立劇場にて、フランコ・ゼッフィレッリ氏と ©三好英輔

北海道洞爺湖サミット関連環境展示会での新日鉄展示に大きな反響

本年7月7～9日にかけて、北海道洞爺湖地域で開催されたG8主要国首脳会議にあわせて、全国各地で関連公式行事が行われた。新日鉄は、G8環境大臣会合に伴う環境展示会である「環境フェアin KOBE」(兵庫県神戸市中央体育館、5月23～26日)、およびサミット直前公式行事の「北海道洞爺湖サミット記念 環境総合展2008」(北海道札幌市札幌ドーム、6月19～21日)に出展して、環境にやさしい「エコプロダクツ」(鉄鋼製品)、環境に配慮した「エコプロセス」(製造工程)、これらを活用した「エコソリューション」(省エネルギー・環境問題の解決提案)の3つの視点から、当社の地球温暖化問題への取り組みや、環境技術を紹介して大きな反響を得た。

環境フェア in KOBE（兵庫県神戸市中央体育館、5月23～26日）

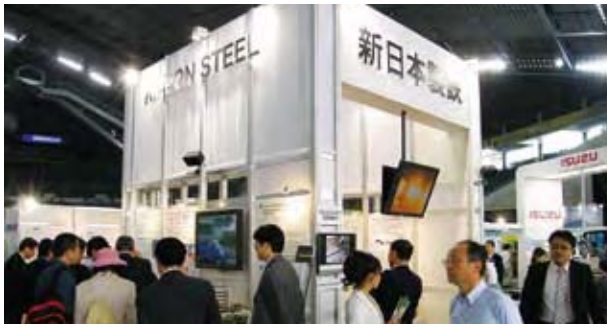
「環境フェアin KOBE」(主催：兵庫県、環境省、経済産業省等)は、G8環境大臣会合に伴う公式行事として開催された。今回のフェアは、北海道洞爺湖サミットに先立って実施されたG8環境大臣会合に併せて開催することで、多くの一般市民への環境問題の普及・啓発を図るとともに、環境に関するさまざまな展開につなげることを目的としたもの。

当社ブースでは、地元の広畑製鉄所(兵庫県姫路市)で行っている、全国で発生する廃タイヤの約10%を再資源化する廃タイヤリサイクル、同製鉄所の主力製品の一つであり、ハイブリッドカーのモーターに不可欠な高機能電磁鋼板、自動車の軽量化を支える高強度自動車用鋼板(ハイテン)の実物や模型などを展示した。また、1971年以来、当社の全国の製鉄所で行っている「郷土の森づくり」や鉄鋼スラグを活用した沿岸の磯焼け改善プロジェクト「海の森づくり」など、さまざまな環境への取り組みをコンパクトにわかりやすく紹介した。鴨下環境大臣、井戸兵庫県知事らも来訪され、展示の説明に熱心に耳を傾けていた。

北海道洞爺湖サミット記念 環境総合展2008（北海道札幌市札幌ドーム、6月19～21日）

「北海道洞爺湖サミット記念 環境総合展2008」は、北海道庁・産業界・環境関連団体が共同で開催し、「環境立国・日本」をアピール。環境問題に対する市民の関心の深さやサミット行事への参加意識の高さから、ビジネスマンのほか、家族連れや学生など約8万4,000人が来場した。

当社は、「環境先進企業としての地球温暖化問題への貢献」をテーマに出展。高機能電磁鋼板やハイテン、ニッテツスーパーフレーム®工法の展示のほかに、室蘭製鉄所(北海道室蘭市)で製造する特殊鋼棒鋼・線材などの高機能商品や、当社製鉄所の持つ世界トップレベルの省エネルギー技術、地域社会と連携した循環型社会構築への取り組みである廃プラスチックリサイクル事業などを紹介するとともに、新日鉄エンジニアリング(株)の地中熱を利用した空調設備の研究開発案件である「NSエネパイル」や、(株)新日鉄都市開発の環境共生住宅の模型を展示した。3日間で合計約3,000人が当社ブースを訪れ、盛況だった。



ウジミナス社拡張投資計画について―イパチンガ近郊サンタナ・ド・パライゾ地区に3番目の製鉄所を建設

当社の南米におけるアライアンスパートナーであり、持分法適用関連会社であるウジミナス社が、現在実行中の拡張計画の修正について発表した。

昨年、同社はイパチンガ製鉄所構内で、320万ｔ／年の鉄源能力拡張計画を発表したが、ブラジル国内鉄鋼需要のさらなる拡大、自社鉄鉱山の買収などの状況変化を反映し、従来の計画を拡大修正し、イパチンガ製鉄所に近接するサンタナ・ド・パライゾ地区で、500万ｔ／年の鉄源製鉄所を建設することを決定した。同社は2012年までに総額141億USドルの投資を行い、これにより鉄源能力拡張・圧延能力増強・鉄鉱山買収およびその拡張が実行され、ブラジル国内におけるリーダーシップの確立と、国際化に向けた基盤強化が達成される。当社も、全社を挙げてウジミナス社を支援し、両社の企業価値の向上を図る。

イパチンガ製鉄所　©Usiminas

<ウジミナス社拡張投資計画の概要>

1）サンタナ・ド・パライゾ地区での鉄源能力拡張
- 立地：イパチンガ製鉄所（ミナス・ジェライス州）から約7km離れた場所。既存インフラ・物流システムの活用が可能。
- 投資額：57億USドル（見通し）
- スケジュール：2011年前半の第1高炉稼働時に250万ｔ／年、2012年の第2高炉稼働時に500万ｔ／年の鉄源能力となる。

2）クバトン製鉄所での鉄源能力拡張
サンタナ・ド・パライゾ地区での鉄源能力増強に加え、ウジミナス社はクバトン製鉄所（サンパウロ州）隣接地を候補地とする300万ｔ／年の新鉄源製鉄所の具体化について継続検討中。

3）圧延能力増強
- イパチンガ製鉄所厚板：50万ｔ／年増強
  熱延：15万ｔ／年増強など
- クバトン製鉄所
  新熱延：第1段階で230万ｔ／年（拡張後480万ｔ／年）
- ウニガル（新日鉄とウジミナス社の自動車用亜鉛めっき鋼板製造JV）
  新第2溶融亜鉛めっきライン建設：55万ｔ／年

4）鉄鉱山買収・拡張および港湾ターミナル用地購入
- セラ・アズル地区のＪ-メンデス鉄鉱山を買収。鉄鉱石生産能力は、現状の500万ｔ／年から、2013年までに2,900万ｔ／年に拡大する予定。
- リオ・デ・ジャネイロ州セペチバ湾沿いに85万㎡の敷地を購入。鉄鉱石および製品の港湾ターミナルの建設を計画中。

お問い合わせ先　広報センター　TEL 03-3275-5021～5023

鉄ダスト系副産物の有効活用による省資源・省エネルギーの推進

鉄ダスト系副産物のリサイクルで世界最大の能力（31万ｔ／年）を有する回転炉床式還元炉（Rotary Hearth Furnace 以下RHF）が、君津製鉄所で本格稼働した。

RHFは、製鉄工程で発生する酸化鉄や亜鉛を含む鉄ダスト系副産物をドーナツ型の回転炉で高温還元し、還元鉄の製造と同時に亜鉛などの金属類を分離回収する設備。これまで亜鉛などを含む鉄ダスト系副産物を製鉄プロセスで直接利用することは困難だったが、RHFでは亜鉛などの非鉄金属類の分離を行うことにより100％有効活用することが可能となる。RHFで還元処理した還元鉄を製鉄プロセスに、回収亜鉛を非鉄プロセスに戻して活用することで、ゼロエミッションが実現するとともに、鉄鉱石や亜鉛鉱石、還元用の石炭、コークスなどの資源、エネルギーの削減が可能となる。

当社は、これまで君津製鉄所で2基、広畑製鉄所で2基のRHFを稼働させており、今回の君津No.3 RHFの本格稼働により、「ゼロエミッション」「省資源」「省エネルギー」の体制が一層進展することになる。

さらに現在建設中の広畑No.3 RHFが稼働すると、製鉄所で発生する鉄ダスト系副産物を全量再資源化する体制が整うことになる。資源・環境問題への対応が重要性を増している中、鉄ダスト系副産物の有効活用による省資源効果は鉄鉱石換算で年間224万ｔ、省エネルギー効果はCO_2換算で年間約80万ｔになる。

君津 No.3 RHF

当社は、高いエネルギー効率と環境負荷の少ない製鉄プロセスを活かし、社内発生の副産物の有効活用のみならず、廃タイヤや廃プラスチックなど、社会や他産業で発生する未利用資源の再資源化を実施している。資源不足・高騰、地球温暖化への関心が高まる中、当社製鉄所のポテンシャルを最大限活用し、今後も社会全体での天然資源の使用量抑制・削減、省エネルギーやCO_2の排出抑制を積極的に推進していく。

お問い合わせ先　広報センター　TEL 03-3275-5021

岩手・宮城内陸地震被害への義援金について

6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震について、新日鉄では被災された地域の早期復興を願い、岩手県および宮城県に300万円の義援金を寄付することを決定した。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

君津製鉄所　累計出銑量３億ｔ達成

7月9日、君津製鉄所の累計出銑量が3億ｔを達成した。1968年11月の第1高炉の初出銑から39年9カ月での記録達成であり、3億ｔ達成は当社の製鉄所としては初。

君津製鉄所は当社で唯一高炉3基を保有する製鉄所であり、今後も高位安定操業を継続し、旺盛な鉄鋼需要に応えていく。

＜3億ｔまでの歩み＞

	達成年月	所要年月	1億t所要年月
1億ｔ達成	1985年4月	16年6カ月	16年6カ月
2億ｔ達成	1997年10月	29年	12年6カ月
3億ｔ達成	2008年7月	39年9カ月	10年9カ月

お問い合わせ先　広報センター　TEL 03-3275-5021

(株)新日鉄都市開発・新日鉄住金ステンレス(株) 提案の共同住宅が、超長期住宅先導的モデル事業に採択

(株)新日鉄都市開発と新日鉄住金ステンレス(株)が提案した共同住宅、「(仮称)グランリビオ高見弐番館」が国土交通省「平成20年度第1回超長期住宅先導的モデル事業(※)」に採択された。

当案件は、新日鉄住金ステンレス(株)が開発した高耐久のクロム系ステンレス異形鉄筋を採用することにより、建物の耐久性を飛躍的に向上させるなど先導的な材料・技術・システムを積極的に導入し、「先駆的な超長期住宅」の実現に向けた取り組みを実践している。

※超長期住宅先導的モデル事業：「いいものをつくってきちんと手入れして長く大切に使う」というストック社会における住宅のあり方について、具体的内容をモデルの形で広く国民に提示し、技術の進展に資するとともに普及啓発を図ることを目的として創設された。平成20年度第1回提案募集は2008年4月11日～5月12日の期間で行われ、最終的に603件の応募があった中から40件が採択された。

「(仮称)グランリビオ高見弐番館」完成予想図

お問い合わせ先
㈱新日鉄都市開発 総務部　TEL 03-3276-8800
新日鉄住金ステンレス㈱ 企画部　TEL 03-3276-4848

新日鉄ソリューションズ(株)が(株)資生堂の新マーケティング・システムを構築、本格稼働

新日鉄ソリューションズ(株)は、(株)資生堂の新マーケティング・システムを構築し、6月から国内化粧品事業において全面稼働を開始した。

資生堂は、2008年から始まる「新3カ年計画」において、「グローバルSHISEIDOブランドの育成強化」「アジアでの圧倒的な存在確立」などに取り組み、持続的な成長確保とシェア拡大を目指している。また、現在27に集約した育成ブランドを、今後は6つのメガブランド、5つのリージョナルブランドを含め合計21ブランドに絞り込む予定でいる。これら取り組みの中で、マーケットの分析をタイムリーに行う体制が不可欠となるほか、マーケティング・システムは、一昨年のファイントイレタリー事業組織の見直しや、今後発生する組織、商品、商流、物流の変更にスピーディに対応することが求められており、今回のシステム刷新につながった。

新日鉄ソリューションズが構築した新マーケティング・システムでは、資生堂の取引先約10万店の出荷およびPOS(Point Of Sale、販売時点)データの情報を統合し、ユーザーが販売データをタイムリーに分析できるようになった。その結果、月次処理などを待たずに、ほぼリアルタイムで売上・損益・在庫などの経営情報が把握可能となり、資生堂におけるビジネスのスピード化、価値創造の促進が期待できる。

お問い合わせ先
新日鉄ソリューションズ㈱
流通・サービスソリューション事業部 営業部 高橋　TEL 03-5117-6040
E-mail：bi-marketing@iss3.ind.ns-sol.co.jp

さらなる広がりを見せるニッテツスーパーフレーム®工法

NITTETSU SUPER FRAME®

「エコあったかい！」を推進する「(株) スーパーフレーム北海道」を設立

(株) 上村オール建材、(有) 山栄デザイン、日鉄商事 (株)、北海鋼機 (株) の４社は、新日鉄が開発したニッテツスーパーフレーム®工法 (以下NSF工法) の北海道事業拠点となる (株) スーパーフレーム北海道を設立した。同社は、NSF工法の営業ＰＲ・設計コンサルティング・必要部資材の販売およびNSF工法の評認定事務などの機能を、道内でNSF工法を利用する建設事業者や設計事業者に提供していく。

北海道洞爺湖サミットが開催された本年に営業をスタートさせ、道内でNSF工法を利用いただくお客様にとって、利便性の高いサービスを提供し、耐久性･耐震性･省エネルギー性などの住宅性能において優れたパフォーマンスを発揮する「エコあったかい！」NSF工法の普及拡大を図る。

当社はNSF工法の全国展開戦略として、各地の拠点パートナーとともに普及推進させていく事業方針であり、同社を北海道の事業拠点として位置付け、道内でのさらなる工法普及を目指す。

＜会社概要＞

会　社　名：株式会社スーパーフレーム北海道
資　本　金：500万円
((株) 上村オール建材65% (経営・営業)、
(有)山栄デザイン20%(設計)、日鉄商事(株)10%(部資材流通)、
北海鋼機 (株) ５% (営業提携))
本社所在地：北海道江別市上江別447－1　北海鋼機 (株) 構内

お問い合わせ先
(株) スーパーフレーム北海道　TEL 011-382-2100

過去最大規模の「第７回ＮＳＦ工法連絡会」を開催

7月11日、当社住宅建材開発グループは、NSF工法の普及拡大に向けた、工法契約者を対象とした「第７回NSF工法連絡会」を本社ビルで開催した。過去最大規模の50社100人が出席し、NSF工法の普及状況、利便性向上に向けた取り組み、短工期や低コストなどのメリットをまとめた「NSF工法の優位性の経済評価」の紹介に加え、資材メーカーや契約者の建築事業者からの提案や事例紹介などが報告された。

NSF工法は事業開始から10年を経て、累計8,000棟超を受注・建設している。用途は、当初の一般戸建住宅から、現在は耐火建築、寮・社宅、店舗・賃貸マンションなどの事業用に拡大し、最近では大規模な寮・社宅を建築するなど、受注拡大を推進している。

今回、同工法の普及に貢献した会社を表彰する「NSFアワーズ」を新設。太平工業 (株)、(株) メトーカケフ、新たに設立された (株) スーパーフレーム北海道など５社に感謝状を贈呈、会場は大盛況だった。

「構造評定」取得でさらなる利便性の向上

NSF工法は、(財)日本建築センターの「構造評定」「建築基準法施行規則第１条の３第１項による図書省略の国土交通大臣認定」を取得する。同認定に適合した構造である建築物は、構造計算に関わる審査を簡略化することが可能となり、構造計算適合性判定についても不要となることから、建築確認申請期間のさらなる短縮が期待される。

ニッテツスーパーフレーム工法®について

NSF工法とは、新日鉄が「薄板軽量形鋼告示」に則り、独自の開発により防耐火 (1時間耐火認定)・遮音・温熱性、耐久性など諸性能を大幅に向上させた枠組壁工法。

また、外壁パネルおよび床パネルの構造面材、外壁材に高炉スラグを主原料とした窯業系面材を使用しており、躯体構造用の薄板軽量形鋼とともに、主要構造に循環環境型部材を活用した環境適合型工法でもある。鉄骨構造と外張断熱通気工法の組み合わせにより、耐久性・耐震性・省エネルギー性などの住宅性能において、優れたパフォーマンスを発揮する。

紀尾井ホール (財) 新日鉄文化財団　８月・９月主催・共催公演から　http://www.kioi-hall.or.jp

８月 31 日　紀尾井の室内楽 vol. ８＜クァルテットの饗宴 2008 ＞
Pioneer Classic Special Concert
出演：パノハ弦楽四重奏団
曲目：ハイドン　弦楽四重奏曲第 42 番、
シューベルト　弦楽四重奏曲第 10 番 ほか

９月 ３日　新日鉄プレゼンツ　紀尾井ニュー・アーティスト・シリーズ
第 12 回　岡崎慶輔 (ヴァイオリン)
出演：岡崎慶輔 (Vn)、伊藤恵 (Pf)
曲目：モーツァルト　ヴァイオリン・ソナタ ト長調、
ブラームス　ヴァイオリン・ソナタ第３番 ほか

12 日　日本音楽のかたち 25　近代長唄の響き その１ 明治期【邦楽】
出演：徳丸吉彦、稀音家義丸 (対談)、今藤美治郎、杵屋勝三郎、杵屋勝国、杵屋五三郎、杵屋巳紗鳳、松永忠五郎 (三味線)、今藤文子、杵屋禄三、杵屋喜三郎 (唄) ほか
曲目：「新曲浦島」「松の翁」「網館之段」「虎狩」

20 日　紀尾井の室内楽 vol. ９
ドイツ・ピアニズムの威光 ペーター・レーゼル ベートーヴェンの真影
ピアノ・ソナタ全曲演奏会　第１回
出演：ペーター・レーゼル (Pf)
曲目：ベートーヴェン　ピアノ・ソナタ第 20 番、
第 17 番「テンペスト」ほか

26、27 日　紀尾井シンフォニエッタ東京　第 66 回定期演奏会
出演：ユハ・カンガス (指揮)、ペーター・レーゼル (Pf)、
紀尾井シンフォニエッタ東京 (Orch)
曲目：ベートーヴェン　ピアノ協奏曲第５番「皇帝」、
シベリウス　トゥオネラの白鳥、モーツァルト 交響曲第 40 番

お問い合わせ・チケットのお申し込み先：
紀尾井ホールチケットセンター　TEL 03-3237-0061〈受付 10 時～ 18 時 日･祝休〉

鉄は、社会を築く必需品。
ますます増大する需要に応えながらも、
鉄づくりで出るCO_2はとことん抑えたい。
新日鉄では懸命に努力を重ねています。
製造工程の連続化や短縮などエネルギーの
無駄をなくすラインの導入や、原料加工時に出る熱を
回収して発電し、製鉄所内の電力を100%まかなう
技術によって、世界最高水準のエネルギー効率を達成。
さらに、既存の設備を使いプラスチックごみの再資源化に
取り組むなど、いま製鉄所は、資源・エネルギーを
有効利用し尽くす、環境技術の集積拠点に。
また、日本の鉄鋼業の持つ技術が全世界に導入されれば、
年間3億トンものCO_2削減が見込まれるという
試算もあり、中国やインドを含めた
各国へのサポートも積極的に
行っています。

CO_2を減らすため、
できること、もっと

先進のその先へ、新日鉄
www.nsc.co.jp

文藝春秋　7月号掲載

CONTENTS

AUGUST & SEPTEMBER 2008 Vol.181

① 特集

多くの支援者とともに歩み、さらなるステージへと発展する新日鉄の音楽メセナ活動

──紀尾井ホールが来館者数 200万人達成！

⑦ トークスクエア
第18回新日鉄音楽賞受賞者インタビュー
幸せと明日へのエネルギーを感じてもらえる演奏をしたい
<フレッシュアーティスト賞受賞>
ピアニスト　上原 彩子氏

なによりも相手に喜んでもらうこと。そのために良いものを撮る。すべてはその積み重ね
<特別賞受賞>
写真家　木之下 晃氏

⑪ GROUP CLIP

表紙－匠の技　明珍 宗理（みょうちん・むねみち）

「鈧」
──合わせ金で中は空洞になっている。
ブレスレットに間違われる

作者プロフィール
1942年姫路市生まれ。第五十二代を襲名した1993年に兵庫県技能功労賞を受賞、兵庫県指定伝統工芸に選定され、1997年には日本オーディオ協会が選ぶ「日本の音の匠」に。「日本文化デザイン賞」大賞、特別賞（2003年）、「姫路市芸術文化賞」（2004年）などを受賞。

NIPPON STEEL MONTHLY
AUGUST & SEPTEMBER
2008年7月29日発行

新日本製鐵株式會社
〒100-8071　東京都千代田区大手町 2-6-3　TEL03-3242-4111
編集発行人　総務部広報センター所長　丸川 裕之
企画・編集・デザイン・印刷　株式会社 日活アド・エイジェンシー
●皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。FAX:03-3275-5611
●本誌掲載の写真および図版・記事の無断転載を禁じます。

GPN Green Purchasing Network 印刷サービス
新日鉄は印刷サービスのグリーン購入に取り組んでいます
FSC ミックス品
FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SGS-COC-2568
© 1996 Forest Stewardship Council